

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：34448

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26671000

研究課題名(和文)性同一性障害当事者の性別移行を促進する生活支援プログラムの開発

研究課題名(英文)Developing a Livelihood Support Program to Facilitate the Male-to-Female Gender Transition of People with Gender Identity Disorder

研究代表者

古谷 ミチヨ (FURUTANI, MICHIO)

森ノ宮医療大学・助産学専攻科・講師

研究者番号：70701845

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、性同一性障害(MTF)当事者の望む性での実生活経験(RLE)を支援するプログラムの開発に向けた質的および量的調査研究である。質的研究では女性パートナーと結婚経験があり子どもを持つMTF当事者が自身の性を探り、性別移行を決心していく過程を支える援助について検討した。量的研究では61名のMTF当事者を対象に治療、望む性の表現状況、就労、カミングアウト、対人関係上の困難等について把握し、治療段階や婚姻状況、戸籍の性別変更等と関連付けた支援を検討する必要性を確認した。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to conduct a qualitative and quantitative investigative research to develop a program that supports the real-life experiences (RLE) in the preferred sex of the male-to-female (MTF) people with gender identity disorder. The qualitative aspect of this study examined the types of support provided to MTF people who marry a female partner and have children through natural processes but eventually explore their own sexuality and decide to undergo a gender transition. The quantitative aspect explored 61 MTF people with gender identity disorder in terms of treatments, the way they express themselves as a member of the desired gender, employment, process of coming out, and difficulties faced in interpersonal relationships. The quantitative aspect also verified the necessity of examining whether the types of support are in line with other factors and processes, including the treatment stage, marital status, and legal sex change on the koseki (family registry system).

研究分野：生涯発達看護学

キーワード：性同一性障害 MTF 望む性での生活経験

1. 研究開始当初の背景

性同一性障害とは身体の性と心の性が一致しない状態で、身体の性が男性で心の性が女性である状態を male to female (MTF)、身体の性が女性で心の性が男性である状態を female to male (FTM) と称する。「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律」は、当事者の性別変更要件として年齢と婚姻の制限、未成年の子がいないこと、性別適合手術 (sex reassignment surgery : SRS) 後であることを義務付けているが、性同一性障害当事者が望む性で社会に適応するには、移行後の性別で生活していく力を獲得することも重要課題である。

日本精神神経学会が定める性同一性障害に関する診断と治療のガイドライン(第4版)は、希望する性別での実生活経験 (real life experience : RLE) が必要十分に試みられていることを身体的治療の開始、継続の条件として挙げている (2012)。RLE にはカミングアウト、外見や行動等の自然さ、生活状況、対人関係、就労、名前の変更等があり、当事者はこれらを実際に体験して自身の社会適応の可否や適応レベルを検討することになる。

日本では 1996 年ころから性同一性障害の治療にスポットが当たり、国内での医療支援は着実に進展した。それに伴って当事者の苦悩や病理が浮き彫りになり、生活支援の重要性が強調されてはいるが、RLE の具体的内容や RLE を試行する中で遭遇する当事者の困難の実態を把握する研究は確認されていない。また生活支援については、MTF 当事者の女性用メイクアップや女性用下着の選択、着用についての援助が一部の医療機関で年に数回実施されているが、その他の RLE については当事者の自助努力に一任されており、体系化された取組みはなされていない。

性同一性障害当事者への支援は治療的観点から優先される医療対応が先行し、ホルモン療法や性別適合手術による身体的性別適合をめぐる課題への継続的な取り組みは必然である。しかし、当事者を生活者としてとらえた時、社会的性別適応を促進するための生活支援が緊要であることは明らかである。

RLE の内容は MTF 当事者と FTM 当事者とは異なる。ホルモン投与によって外見上の適応が比較的速やかに進む FTM 当事者に対し、MTF 当事者では特有の、より細やかで持続的な生活適応上の課題達成に取り組む必要があり、それに伴う心身の負担が生じている。また、MTF 当事者では性別違和感を自覚する時期に幅があると報告されており、生来の男性ホルモンの影響を受けて典型的な男性的外観を形成した後に治療を開始した当事者では、個人差もあるがホルモン投与による外観の女性化に限界があるため、FTM 当事者以上に多岐にわたるストレスを抱えているのではないかと考えられる。以上の理由から、優先的に MTF 当事者の RLE について現状を把握し、支援を検討する必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、性同一性障害 (MTF) 当事者の RLE が円滑に維持、促進されるための生活支援プログラムの開発に向け、当事者が移行後の性別で社会に適応して生活する上で必要な性表現・性役割行動上の課題、環境調整や整備について検討することである。

3. 研究の方法

(1) 質的研究

① 研究参加者のリクルート

A 大学ジェンダークリニックの担当医師および性同一性障害当事者自助団体の主宰者に口頭または文書で研究の趣旨を説明し、承諾を得た。その上で、クリニックが主催する生活支援プログラムの参加者と自助団体が主催する交流会の参加者に協力を依頼し、女性パートナーと結婚経験があり子どもを持つ 5 名の MTF 当事者から研究参加の承諾を得た。

② 女性パートナーと結婚経験があり子どもを持つ MTF 当事者の性別移行にまつわるインタビュー調査

インタビュー前に、基本属性に関する自記式質問紙への記入を依頼した。内容は年齢、性自認、性指向、性別違和感を自覚した時期と違和感が増強した時期、診断と治療の履歴、婚姻状況、家族構成と居住形態、家族にカミングアウトした時期と契機などとした。インタビューはインタビューガイドを用いて半構造化面接を実施した。内容はパートナーと出会う以前および結婚前後の性自認、性別違和感の状態、女性表現の経験、結婚までの経緯、カミングアウトに至った経緯、カミングアウトや性別移行に伴うパートナーや子どもとの関係性の変化などとした。

③ インタビュー内容の分析

インタビュー内容を逐語化し、パートナーにカミングアウトするまでの生活の実態と心理状態に着目して記述内容の意味を解釈し、カテゴリーを生成した。

(2) 量的研究

① RLE の具体的な内容、状況の把握

MTF 当事者の RLE の実態調査において具体的に現実的な質問を設定するため、数名の MTF 当事者から実際に行っている RLE の内容や実施上の困難について聴き取り、具体的な内容や状況を把握した。

② 当事者の意見を反映させた質問紙の作成

①を踏まえた質問紙を作成して数名の MTF に試行を依頼し、質問の内容や表現の妥当性について意見を聞いた。その意見を反映させて修正し、調査用の質問紙を作成した。

③ MTF 当事者の RLE の実態調査

2014 年 12 月～2016 年 6 月、A 大学ジェンダークリニック受診者および全国に支部を持つ性同一性障害当事者交流会参加者のうち MTF 当事者 80 名を対象に、無記名自記式質問紙調査を実施した。調査は当事者に直接

依頼し、回答は回収箱または郵送法とした。調査内容は、対象の属性、治療、戸籍上の性別と名前の変更状況、職業と雇用上の性別、望む性の表現状況、カミングアウトの状況、望む性での対人関係、就労状況、生活支援への要望などとした。

4. 研究成果

(1) 質的研究

研究参加者の年齢は 48～64 歳、性別違和感を自覚した時期は 7～11 歳であったが、それが増強した時期は 13～40 歳代初めと幅があった。性指向は男女両方が 3 名、男性 1 名、女性 1 名であった。性同一性障害の診断を受けたのは 45～52 歳で、現在までの治療はホルモン療法を全員が施行しており、そのうち精巣摘出術を受けた者が 1 名、SRS を施行した者が 2 名であった。結婚年齢は 25～29 歳で、婚姻関係を継続し同居中の者が 2 名、離婚して別居した者が 2 名、死別した者が 1 名であった。パートナーにカミングアウトした年齢は 44～62 歳で、その契機は 2 名が偶然の露呈、3 名が治療への同意を得るためであった。研究参加者がパートナーにカミングアウトするまでの生活の実態と心理状態は、【自らの意思または成り行きで引き受けた、男としての結婚】【女性性を封印する決意】【平穏な夫婦関係に潜む性役割葛藤】【女性性を確信して再燃した女性表現欲求】【性の多様性を知って加速した自己の探求】【女性を自認して込み上げた、男性の身体で生き続けることへの限界感】【一人で進めた女性として生きる取り組み】【露呈または治療上の必要性によるカミングアウト】の 8 カテゴリーで表現された。女性パートナーと結婚経験があり子どもを持つ MTF 当事者の性別移行を支える援助として、当事者の性の探求を促す環境整備、自己受容への寄り添い、女性としての新たな人生の選択を支える援助について検討した。

(2) 量的研究

性同一性障害 (MTF) 当事者 80 名のうち、有効回答の得られた 61 名を対象とした。RLE の実施は 54% がフルタイムで、31% が私生活のみ実施しており、13% は実施していなかった。望む性の表現では「無駄毛の処理」「女性用メイク」の実施度が高く、実施したいが難しいものとしては「会話やしぐさでの女性表現」「太りすぎないための運動や食生活」の割合が多かった。カミングアウトは約 93% が経験しており、その相手は母親、友人、仕事関係者が多かった。約 51% がカミングアウトによって気まづくなった相手がいると回答し、約 90% にカミングアウトへの迷いや不安があった。望む性で周囲と関係を築く上での困難、不安があると回答したのは約 90% であった。望む性での就労では「履歴書に女性の姿の写真を添付」「女性用トイレの使用」「女性の姿での通勤」の実施度が高く、実施

したいが難しいものとして「履歴書の性別を女性と記載」「女性用更衣室の使用」の割合が多かった。約 75% が望む性で働く上での困難があると回答し、そのうち約 60% が「カミングアウトによって不採用になる」ことが困ると回答した。RLE を行う上で受けたい支援があると回答したのは約 80% で、そのうち約 43% が戸籍の性別変更への支援を希望していた。

(3) 今後の展開

質的研究では、女性パートナーと結婚経験があり子どもを持つ MTF 当事者が、パートナーにカミングアウトした以後の身体的社会的性別移行に伴う生活の変化、パートナーや子どもとの関係、人生展望についての分析を進め、当事者の性別移行段階に応じた継続支援のあり方について研究を進めたい。

量的研究では治療段階、戸籍の名前や性別変更の有無、雇用状況、婚姻や子どもの有無などと RLE の状況との関連について分析を進め、当事者の特性に応じた RLE の傾向を把握するとともに、質的研究での知見も踏まえて円滑な RLE の維持、促進に資する支援内容の体系化に向けた研究を進めたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

古谷ミチヨ、川村千恵子、中塚幹也：女性パートナーと結婚経験があり、子どもを持つ性同一性障害 (MTF) 当事者の性別移行を支える援助—カミングアウトまでの生活の実態と心理状態の分析から—。母性衛生 Vol. 58 No. 1:65-73, 2017. 査読あり

〔学会発表〕(計 1 件)

古谷ミチヨ、川村千恵子、中塚幹也：妻子を持つ性同一性障害 (MTF) 当事者がカムアウト以前に経験した「望む性での生活」と心理状態。第 56 回日本母性衛生学会, 2015 年 10 月 16 日, いわて県民情報交流センター, 岩手県盛岡市

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

古谷 ミチヨ (MICHIO FURUTANI)
森ノ宮医療大学・助産学専攻科・講師
研究者番号：70701845

(2) 研究分担者

中塚 幹也 (MIKIYA NAKATSUKA)
岡山大学・保健学研究科・教授
研究者番号：40273990
川村 千恵子 (CHIEKO KAWAMURA)
甲南女子大学・看護リハビリテーション
学部・教授
研究者番号：20281272

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()